

2 堂地遺跡出土遺物の検討

(1) 瓦塔について

堂地遺跡の調査では、中世の溝（SD 35）から平安時代に位置づけられる瓦塔の破片が出土している。この溝からは13世紀前半を中心とするかわらけや緑釉盤が出土しており、瓦塔は周囲からの流れ込みと考えられる。このような出土状況から瓦塔本来の設置場所やどのような宗教的役割を果していたのか、その性格を解明することは難しい。しかしながら、周辺地域における瓦塔出土遺跡との比較検討を通じ、在地社会における仏教文化受容のあり方や寺院建立の様相を復原するための示唆に富む内容を内包しているものと考えられる。

ここでは平安時代における堂地遺跡の様相を明らかにすることを目的として瓦塔の形態的特徴と時期的位置づけを中心に若干の検討をおこないたい。

1. 瓦塔の観察

堂地遺跡から出土した瓦塔は、隅棟を中心とする屋蓋部の破片1点だけで、他に軸部や相輪部の破片はまったく検出されていない。出土した屋蓋部の特徴について列記すると、次のようになる。

- ・屋根瓦表現が半截竹管状工具による押し引きナデ調整技法によって丸瓦のみが表現されている。
- ・瓦の継目は、軒先端から2.0 cmのところに1つ施し、隅棟に接する丸瓦は階段状に施す。
- ・屋蓋部の大きさを復原すると一辺約27 cmを測る。この大きさは美里町東山遺跡瓦塔（今泉1993）と比較した場合、初層の大きさに相当している。
- ・隅棟や地覆などの突帯部分は丁寧にナデ調整が施されている。
- ・軒裏は、全体に粗いヘラ削り痕が目立ち、地垂木のみを表現した一軒構成である。
- ・軒裏垂木表現は、横幅設定のためのヘラ状工具沈線設定後、垂木と垂木の間を深めにヘラ削りすることによって表現している。
- ・垂木は幅が狭く、垂木の間隔をやや広くとっている。

・軒先部の一部に二次焼成により赤褐色に変色した部分がみとめられる。

・胎土は非常に精選され良好で、わずかに赤色粒子・白色微粒子・石英・角閃石を混入する。

・焼成は酸化焰焼成で、淡橙色の土師質である。

堂地遺跡出土の瓦塔屋蓋部の特徴について簡単にまとめると、土師質焼成で、瓦部分は半截竹管状工具の押し引きナデ調整によって丸瓦のみを表現し、瓦継目は軒先付近に1つのみを施している。軒裏垂木は一軒で、ヘラ状工具によって削り出されている点などが挙げられる。

2. 瓦塔の時期的位置づけ

瓦塔は、須恵質または土師質に焼造された塔形の土製品で、塔身軸部・屋根部を数段分と、九輪・水煙などの部品を組み合わせで作られている。形態により層塔・多角塔・宝塔に分けられ、三重・五重・七重などの層塔が主流を占める。また、塔形態のものだけでなく、金堂を模した瓦堂もあり、両者が対となり小伽藍的空間が生み出されていたと想定される。造立の時期については、少なくとも奈良時代初期に出現し、平安時代初期を中心に隆盛する。その分布は東日本に集中し、とりわけ関東・信州・東海・北陸地方に数多く分布していることが指摘されている（上村1991）。

さて、瓦塔に関する編年的研究は全国的な視野に立って主に斗棋部表現の変化を指標とした編年が松本修自（松本1983）、高崎光司（高崎1989）によって提示されたのを契機に、近年、近畿地方の石井清司（石井1996）・石田成年（石田1997）、北陸地方の善端直（善端1994）、信州地方の林和男（林1985）、出河祐典（出河1995・1998）、関東地方の池田敏宏（池田1994～1999）、飯塚武司（飯塚1997）らが、各地域の様相についてそれぞれの視点で分析し、検討を加えている。

埼玉県内では石村喜英（石村1973 a・b）の精力

的な研究を嚆矢として、駒宮史朗・栗岡眞理子（駒宮・栗岡 1994）による集成作業、横川好富（横川 1980）、鈴木徳雄（鈴木 1987）、車崎正彦（車崎 1990）、今泉泰之（今泉 1993）、宮瀧交二（宮瀧 1995）、植木智子（植木 1997）らの研究があり、瓦塔の性格や編年・製作技法・瓦塔造立の歴史的背景などについて、さまざまな角度からの研究が深化されている。

先述したように池田氏は関東地方における瓦塔屋蓋部の瓦表現と垂木表現の分類をおこない、編年を試みている。ここでは北武蔵地域の資料を中心に引き上げ、類型化を試みた池田氏の分類をもとに、堂地遺跡出土瓦塔の時期的な位置づけについて考えてみたい。

堂地遺跡瓦塔は、屋根瓦表現が有節沈線による単節の瓦継目をもつことから、池田分類の幅狭工具押し引き A 手法、軒裏垂木表現は一軒構成で、垂木幅、垂木間隔を狭くとりヘラ削り出し C 2 手法を採用している（池田 1995・1996）。これらの特徴は上西原類型瓦塔に該当し、共伴遺物の検討から 9 世紀中葉を中心とした時期に位置づけられている。しかし、上西原類型瓦塔に該当する千葉県木更津市小谷遺跡 1 号瓦塔は共伴遺物の検討から 8 世紀末葉を中心とする時期に比定されていることから（甲斐 1998）、年代観に関して検討の余地を残している。確かに堂地遺跡瓦塔を仔細に検討すると、垂木間隔がやや幅広くとられていることに気づく。その特徴は、上西原類型瓦塔に先行する東山類型瓦塔にみられるヘラ削り出し C 1 手法に近く、ヘラ削り出し C 1 手法からヘラ削り出し C 2 手法への過渡的な様相を示すものとも考えられる。堂地遺跡瓦塔の時期的位置づけについては、共伴遺物がないことから時期を特定することは難しいが、やや幅をもたせ 8 世紀末葉～9 世紀中葉に比定しておきたい。

今回の調査成果から、堂地遺跡における古代集落の形成は 8 世紀中葉頃から始まり、9 世紀前葉から中葉にかけて多くの堅穴住居跡が営まれ、最盛期をむかえた想定されている。出土遺物には墨書土器「幸」や

風字硯など、当遺跡の性格を示唆する遺物がみられるが、瓦塔に直接結びつくような遺構の存在や仏教的色彩の強い遺物などはまったく検出されていない。しかし、瓦塔の製作年代と集落規模の拡大する時期が、おおよそ符合することから、瓦塔をまつり、それを信仰した集団（個別経営）の性格や自立性の問題などもあわせて、集落内における仏教信仰の浸透を考える上で注意を要するであろう（宮瀧 1995）。

現状では遺跡周辺に寺院や瓦塔を安置する堂宇（仏堂施設）の存在を推定する積極的な証拠は見出し難い。今後の調査の進展に期待したい。

3. 北武蔵南部の瓦塔出土遺跡

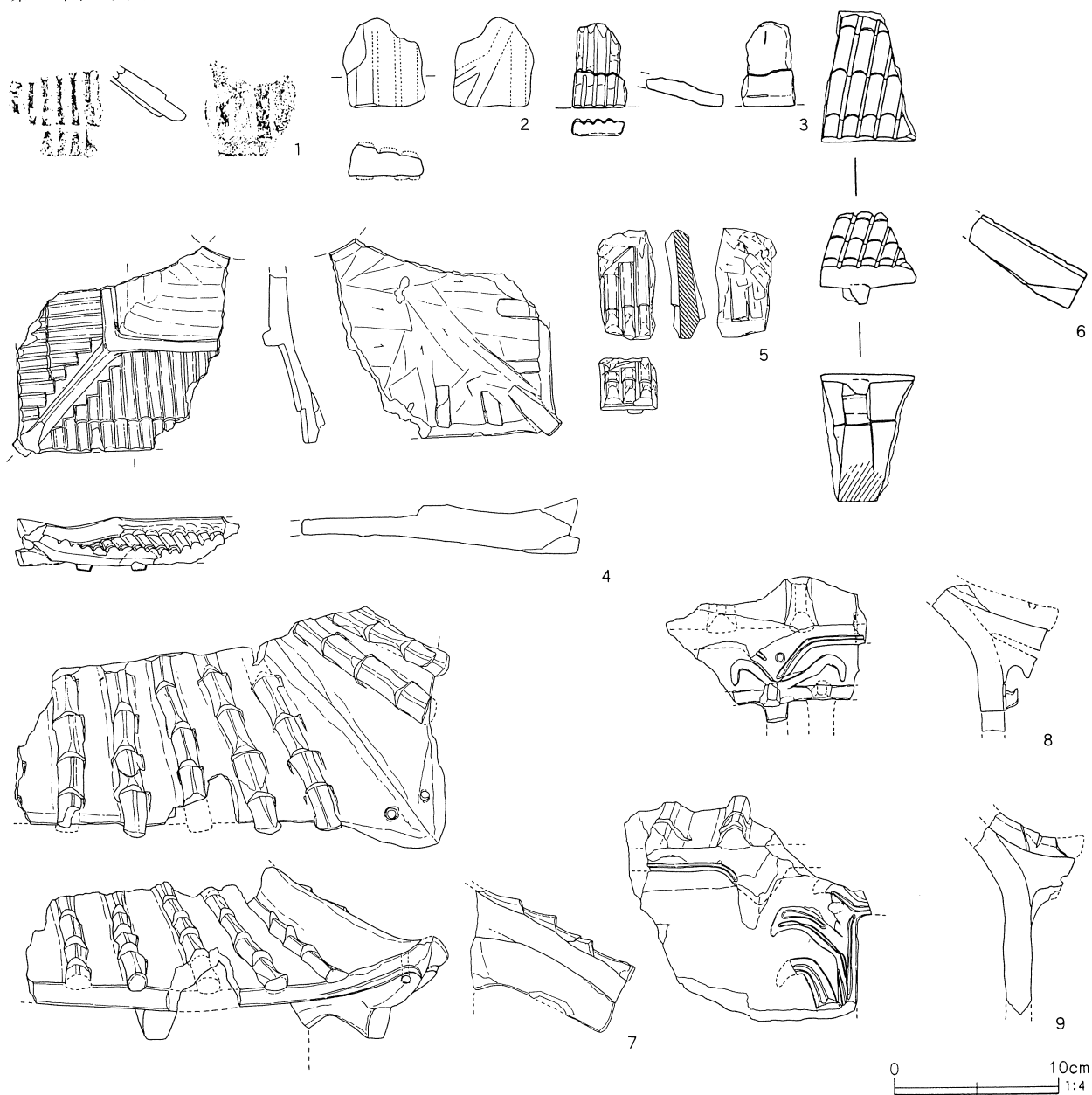
堂地遺跡の所在する比企郡川島町は、荒川をはじめとする越辺川、都幾川、市野川などの中小河川によって形成された肥沃な沖積地が広がり、旧流路に沿って複雑に自然堤防が発達している。遺跡はこうした自然堤防上に立地しており、川島低地における瓦塔出土例としては初出である。北西約 4 km には県内最古の瓦塔を出土する坂戸市勝呂廃寺が所在しているのをはじめ、周辺の台地部や丘陵部には瓦塔出土遺跡が数多く分布している。

ところで埼玉県内における瓦塔出土遺跡数は、伝承例や中・近世のものを含め 1999 年の時点で 65 遺跡の多くを数えたが、その後の出土例の増加や補遺例などを加え、現在 69 遺跡の所在が確認されている（註 1）。ここでは荒川以南の北武蔵南部（中武蔵）を中心に瓦塔出土遺跡の様相について瞥見したい。

堂地遺跡の所在する比企郡市内における奈良・平安時代の瓦塔出土遺跡の分布は、小川町 1 例、嵐山町 2 例、滑川町 3 例、川島町 1 例、鳩山町 9 例、都幾川村 1 例の合計 17 例を数える。出土遺跡を性格別にみると寺院跡 1 例、集落跡 8 例、塚 1 例、窯跡 7 例となる。地域的な特徴として鳩山町を中心に広がる北武蔵最大の須恵器生産地、南比企窯跡群からの出土例が目立つ。特に、鳩山窯跡群柳原 A 地区で検出された瓦塔焼成土坑は、須恵器窯以外の焼成遺構として 9 世紀前半に

1 堂地遺跡（川島町） 2 慈光平庵寺（小川町） 3 多武峯遺跡（都幾川村） 4 中尾遺跡（滑川町） 5 用土庵 B 遺跡（滑川町） 6 天裏遺跡（滑川町） 7 行司免遺跡（嵐山町） 8 宮の裏遺跡（嵐山町） 9 南比企窯跡群（鳩山町） 10 稲荷前遺跡（坂戸市） 11 勝呂庵寺（坂戸市） 12 川越城本丸跡（川越市） 13 弁天西遺跡（川越市） 14 鶴ヶ丘遺跡／鯨井新田出土（川越市） 15 東下川原遺跡（川越市） 16 大寺庵寺（日高市） 17 高岡庵寺（日高市） 18 若宮遺跡（日高市） 19 姥田窯跡（日高市） 20 川崎遺跡（上福岡市） 21 東台遺跡（富士見市） 22 宮地遺跡（狹山市） 23 東八木窯跡（狹山市） 24 下谷ヶ戸遺跡（入間市） 25 森坂遺跡（入間市） 26 お伊勢山遺跡（所沢市） 27 上木崎遺跡（浦和市） 28 上木崎三丁目遺跡（浦和市） 29 寺内庵寺（江南町） 30 馬場裏遺跡（行田市） 31 多摩湖町出土（東京都東村山市）

第129図 北武蔵南部の瓦塔



1 上木崎三丁目遺跡（浦和市） 2 慈光平庵寺（小川町） 3 東台遺跡（富士見市） 4 堂地遺跡（川島町） 5 川崎遺跡（上福岡市）
6 鶴ヶ丘遺跡／鯨井新田出土（川越市） 7～9 姥田窯跡（日高市）：高崎光司氏原図

における瓦塔の量産化の問題を考える上で重要な問題を提起している（出河 1996）。最近の調査では、滑川嵐山ゴルフコース内遺跡群の中尾遺跡と用土庵 B 遺跡から瓦塔片がまとまって出土している（植木 1997）。瓦塔の出土状況は中尾遺跡では丘陵頂部平坦面を中心に、用土庵 B 遺跡では丘陵肩部から南斜面にかけて、他の遺物に混在した状態で出土しており、瓦塔と結びつくような遺構は検出されていない。このように造塔

のあり方については不明な点を残すが、隣接する柳沢 A 遺跡から四面廂をもつ 2×3 間の掘立柱建物跡が検出されており、仏堂的な性格をもつ建物として瓦塔との関連性が指摘されている。

次に、入間郡市内では川越市 4 例、所沢市 1 例、狭山市 2 例、入間市 2 例、上福岡市 1 例、坂戸市 4 例、日高市 5 例の合計 19 例が知られている。出土遺跡の性格は寺院跡 4 例、集落跡 8 例、窯跡 4 例、不明 3 例

となる。寺院跡では坂戸市勝呂廃寺、日高市高岡廃寺・大寺廃寺・若宮遺跡（女影廃寺）などから多数出土している。このうち高岡廃寺跡では瓦塔の塔心礎と想定される方形ピット遺構の周辺からまとまって出土しており、本格的な木造塔の代用品としての機能をもっていたものと想定されている。県内の古代寺院跡の多くから瓦塔が出土していることを勘案すれば、伽藍寺院では木造高層塔創建まで、あるいは木造塔倒壊後にその代用として造塔されるような場合が多かったことが想起される。

生産跡からの出土例は、日高市姥田窯跡・台出土、狭山市東八木窯跡、入間市下谷ケ戸遺跡の4遺跡が知られる。姥田窯跡については実態が不明であるが、丸瓦と平瓦を表現した須恵質の瓦塔が出土している。屋蓋部から連続して軸部が作られ、壁面に草葉文が描かれた特徴的なもので、勝呂廃寺瓦塔と並び古相を呈している。このほか東金子窯跡群の外縁部に位置する入間市森坂遺跡では粘土採掘坑から土師質の請花が単独で出土しており、東金子窯跡群でも瓦塔が定量生産されていたことを物語っている。

最後に、堂地遺跡出土瓦塔について類例との比較検討を試み、まとめにかえることにしたい。

前述したように堂地遺跡瓦塔は池田分類の上西原類型瓦塔に該当し、8世紀末から9世紀中葉に位置づけられる。北武蔵南部における上西原類型瓦塔の分布は上福岡市川崎遺跡、富士見市東台遺跡、浦和市上木崎三丁目遺跡・上木崎遺跡などの集落跡や日高市高岡廃寺・大寺廃寺・若宮遺跡等の寺院跡などが知られている。池田氏の研究によれば、上西原類型瓦塔は北武蔵では最も出土例が多く、丸瓦のみの表現でかつ土師質の製品としては普遍的な類型として位置づけられている。8世紀後半から9世紀にかけて集落を中心に瓦塔の出土例が激増し、この時期に瓦塔の製作技法や表現方法に簡略化が進み、焼成も須恵質から土師質へと大きく変化し、量産化が図られたと指摘されている（高崎1989）。さらに、この時期に造塔意識の上でも大きな変革期をむかえたことが予想されることから（註

2）、堂地遺跡瓦塔についても民間仏教の活発化と言った歴史的背景の中に具体的に位置づけていく作業が今後必要であろう。

以上、堂地遺跡出土の瓦塔をめぐる問題点について論じてきたが、資料的な制約もあり瓦塔の時期的な位置づけを中心とした検討に終始してしまった。今後の課題として瓦塔の性格や用途の問題、集落内における仏教信仰のあり方、他の仏教関連遺物との関連性などについてさらに検討していきたいと思う。

謝辞 日高市教育委員会の中平 薫氏には姥田窯跡出土瓦塔の実見について御配慮をいただきました。そして日頃から御指導をいただいている高崎光司氏には姥田窯跡瓦塔の実測図の使用を御快諾いただきました。記して感謝申し上げます。

註

- (1) 1999年作成の「埼玉県内瓦塔地名表」（大谷1999）に記載漏れの瓦塔出土遺跡は、下記の通りである。
 - ①川越市弁天西遺跡（埼玉県教育委員会1998）
 - ②富士見市東台遺跡（加藤・隈本1996）
 - ③川島町堂地遺跡（本報告書）
 - ④妻沼町飯塚北遺跡（埼玉県埋蔵文化財調査事業団1999）
- (2) 須田 勉氏は、上野・下野・北武蔵に瓦塔が集中する現象について上野緑野寺・下野大慈寺を拠点とした道忠教団の活動範囲を示すものであるとして、塔信仰に支えられた仏教信仰が地域的に展開した状況を想定している（須田1999）。